

祈祷と無祈祷（一）

——キリスト教と親鸞教の対比——

第一章	親鸞教と祈祷	102
(1)	祈りなき浄土真宗	102
(2)	佛教における祈祷史	104
第二章	祈祷否定の典拠	105
(1)	法然・親鸞の言説	105
(2)	存覚・蓮如の言説	106
第三章	祈祷否認の理由	108
(1)	おまかせの一つのみ	108
	——大原性実の所説——	108
(2)	祈りの虚偽性と呪心	110
	——島地大等の所説——	110
第四章	《念願》的祈祷	113
(1)	法然のいのり	114

小畑進

(2)	親鸞のいのり	114
	第五章 《強要》的祈祷	116
(1)	叩けよ・さらば	
	— 柳 宗悦の所説 —	118
(2)	非・御利益主義	120

(二) につづく

第一章 親鸞教と祈祷

(1) 祈りなき浄土真宗

実家の屋根の上に、畳四つが敷かれます程度の広さの物干台が有ります。家の人々は其れを「火の見」と呼んでいました。……私はその火の見に、ひとり昇っております。……「祈りなさい！ 祈らない人は死人です」と。その時の私の先生でありましたドイツ婦人のエリザベス・フーホルドさんは、日曜日の午後の私一人に対する聖書講義の後に、必ずそう訓まごされました。生きている人は祈る。そうして私は機会のあるごとに祈っております。

やがて母が火の見に登って来ていました。それを知りませぬ私は、声を出して暫く祈り、祈り終わって顔をあげました時に、階段の上に立っています母の上半身と、その微笑しています顔を、星あかりに見ました。「何を言っていましたのや？ ひとりで」、母は笑いながら上ってきました。……「祈っていたんです」「誰にな？」、母はさも面白そうにたずねながら、私のそばに坐りました。「神に祈っていたんです。神は僕の父ですから」「そうかいな。祈らねば聞いて下さらん神さまが何になるね」と母はきわめて心やすく言いながらビスケットの罐を開いて私の膝の前に出しました。そうして、ひとり言のように、「祈らねばならんというのは情ないことやな」と、静かにつぶやいて

いました。

神について、イエスについて、祈りの意義について、何も知らぬはずの母、それは異端者の真宗信者の老年の母から、事もなげにそう言われましたことを、ひそかに憤慨しながら、私は黙ってビスケットをつまんでおりました。この火の見の上の記憶が、明かに思い出されました私は、さらにのちの日に、あらゆる宗教のうちに浄土真宗のみが祈りの絶無であることを何かの書物について読みましたのを、つづいて思い出しました。親鸞は祈らなかつたと伝えられる。はたしてそうなのか。なぜにか？祈り無き信仰が有るのか？祈りの絶無であるという信仰、それは有るべからざる存在を見るごとき、極端な矛盾が私に感じられました。しかし、自身が祈りに苦しみつつある現在において、祈りなき信仰に生きありし如き親鸞に、前に離れて、およそ一年のちに、私はふたたびひかれ初めました^①。

以上は、かつて少年小説家として健筆をふるった山中峯太郎が、キリスト教から浄土真宗へ転頭する告白の一節です。

或いは「祈りなき宗教」と聞いて、耳を疑われる方も少なくないことでしょう。一体、祈りなき宗教などというものがあるのでしょうか。あります。親鸞教・浄土真宗がそれです。「祈りは宗教に不可欠なもの」とは、一般常識で、たいいていの神社佛閣でも、いわゆる新興宗教でも―その内容の如何を問わず―、そしてキリスト教でも、これを重視して、攘災招福のために中心的宗教儀礼とされていることは周知のとおりです。しかるに、親鸞教では祈祷を否定すると言われるのです。これを「雑修」として退けると言われるのです。同じ佛教内諸宗派が、こぞって呪術祈祷をこゝとしていさ中に、真宗はこれに背を向けて否定的な態度をとるのです。

(2) 佛教における祈禱史

ここで、ひとまず佛教の中における祈禱の歴史を見ておきましょう。代表的佛教辞典では、祈禱は、「心願を籠めて佛菩薩の冥祐を求むるの意、また祈願、祈念、祈請とも言う。主として攘災治病の現世求福の意に用いられる^②」と、定義されます。インドにあつては、ペーダ時代に呪術祈禱の法が盛んに行われ、中国においても古くから天地神祇に祈る風がありました。早い時代の佛教經典中には祈禱のことが見えないようです。けれども、やがて密教が興起するに及ぶや、諸佛諸尊を本尊として、種々の福祉を求めようになります。密教は中国に及んで、持呪祈禱が流布し、口に諸尊の密呪を誦し、身に印契を結び、心に本尊の觀想をこらせば、すなわち本尊の三密と相應して、能くその願うところを満足することを得として、天変・地妖・寇賊・疾病等を、みな加持修法を用いてこれを攘おうとしました。史上、盛衰はあつたとしても、雨を祈り、晴れを祈り、雪を祈り、疫を祈り、日月蝕を祈ることは、ひきつづいておこなわれて行きました。

日本においても、祈禱、大占、祓式（かどまじ）、または呪術などと称して、上古から神祇に祈るの風は上下におこなわれていました。が、佛教の伝来により、講經・法会・造像・起塔など、息災増益のために盛んにおこなわれて、かの聖武天皇の東大寺建立のごときは、鎮護国家の祈願所となすとの目的より出でたものでした。また平安以後となると、護持僧なるものがおかれて、もっぱら玉体安穩つまり天皇の健康のために祈ることとなり、さきあげた東大寺をはじめとして、真言宗の東寺、天台宗の延暦寺や園城寺等の諸大寺は、鎮護国家、武運長久、息災延命、懺悔滅罪、御所築造等について、それぞれ祈禱の修法をおこないました。これが鎌倉・室町時代に入ると、幕府は、祈禱奉行を設けて祈禱を司らしめるにいたり、中世禪家においても攘災・伏敵を祈り、日蓮も息災延命祈禱の事を書に録して、以後その宗徒は種々の呪術をおこなって行きます。他力浄土門の法然に始まる浄土宗においても疫病・晴雨のために、勅を奉じて祈るなどのことを行いました^③。

第二章 祈祷否定の典拠

しかるに、親鸞教・真宗の門徒は、これらの現世祈祷に背を向けるのです。親鸞の宗教・浄土真宗と云えば、人間的宗教であることを自負する最たるものとされていきますのに、人間本来の心情にとり、人間本来の性情を抑えてでも、祈りに否定的なのです。なぜなのでしょう。その理由は何なのでしょう。

(1) 法然・親鸞の言説

まず、親鸞の恩師であり浄土宗祖であった「法然」に、次のような言葉があります。

詮ずるところは、ただ一向専念と言へる事あり。一筋に弥陀をたのみ、念佛を修して、餘の事をまじへざる也。その故は、寿命の長短と言ひ、果報の深淺と言ひ、みな宿業にこたへたる事を知らずして、いたづらに佛神に祈らんよりも、一筋に弥陀をたのみて二心なければ、不定業をば転じ、決定業をば来迎し給ふべし。無益のこの世を祈らんとて、大事の後世を忘るゝ事は、さらに本意にあらず^④。(念佛往生義)

そして「親鸞」自身の言葉としては、

それもろもろの修多羅^{しゅたらか}(経典)によりて、(教えの)真偽を勸決^{かんけつ}(判断)して、外教(佛教以外の)邪偽の異執(まちがったばかり)を教誡せば……餘道(外道)に事^{つか}ふことをえざれ、天を拝することをえざれ、鬼神を祠ることをえざれ、吉良日を視ることをえざれ^⑤。(化身卷)。

佛号むねと修すれども、現世をいのる行者をば、これも雑修と名づけてぞ、千中無一ときらはる、^⑥ (高僧和讃)。

五濁増ごじゆくぞうのしるしには、この世の道俗ことごとく、外儀げぎは佛教のすがたにて、内心外道を帰敬せり。かなしきかなや道俗の、良時・吉日えらばしめ、天神・地祇をあがめつ、卜占・祭祀つとめとす^⑦（愚禿悲歎述懐和讃）。

(2) 存覚・蓮如の言説

また、本願寺第三世覚如の長子〈存覚〉にも次の如くあります。

まめやかに浄土をもとめ往生をもとめ往生をねがはんひとは、この念佛をもて現世のい、のりとは、おもふべからず、たゞひとすじに出離生死のために念佛を行ずれば、はからざるに今生の祈祷ともなるなり^⑧（持名鈔）。

また本願寺第八世たる〈蓮如〉も、同じ線をたどって次のように述べています。

もろもろの雜行をこのむこころをすて、あるひはまたもの、いまはしく思ふこころをもすて、一心一向に弥陀をたのみたてまつりて、そのほか余の佛菩薩諸神等にもこころがけずして、たゞひとすじに弥陀に帰して^⑨（御文章）。

それ弥陀如来一佛を深くたのみたてまつりて、自余の諸善万行にこころを懸けず、又諸神・諸菩薩に於て、今生のい、のりをのみなせる心を失ひ^⑩（同）。

されば、後生を一大事をおもひて、信心決定して極楽をねがふものは、後生のたすかる事はなかなかまふすにおよばず、今生もあながちのぞみこのまねども、をのづから祈祷ともなるなり。そのいはれを他経にかくのごとくとけり。その文には、それ現世をい、のる人はわらをえたるがごとし、後生をねがふ人はいねをえたるがごとし、とたとへたり。いねといふものできぬれば、をのづからわらをうるがごとし。これは後生をねがふ人のことなり。

今生をいゝのる人は、わらをばえたるがごとし、といへるこゝろなり。されば、信心決定したる人は、今生も別してこのまづ、ねがはざれども、諸佛菩薩・諸天善神の加護にも、あづかる間、かゝる殊勝にめでたき天上の佛法を信じて、今度の極楽往生をとげん、とねがふべきものなり^⑪。（同）。

また、本願寺からは異端の書と考えられてきたものですが、室町時代から戦国時代にかけての内容をもった『九十箇條制法』なる真宗の掟に、

門徒の中二人ノ煩へハ、祈祷ヲシ、ハラヒヲシ、神子・陰陽師ヲモテ、病者ライノルコト、当流ノオキテニソムケリ、イソキ門徒ヲハナサルヘキコト肝要ナリ^⑫。（九十箇條制法）。

或いはこの江戸版本にも次のようにあります。

当流門徒ノ中ニオヒテ、病者ヲ祈るコト、諸方ニ遍布セシム、強ク停止スヘキ事^⑬（蓮如上人九十箇條）

御門徒ノ中ニワツラヘハ祈祷シ、神子・陰陽師ヲモテ病者ライノリ、或ハ今生ノ寿福ヲ神ニイノル輩ハ、聖人ノ御門徒ニアラス、イソキテ門徒ヲハナサルヘキ事^⑭。（同）。

等々。

これらの典拠によって「真宗無祈祷論」は、たとえば西本願寺派勸学へ大原性実へによって、次のごとく打ち出されます。

たとへ往生のための正定業しょうていごふたる念佛を修しても、現世の利益を目的とせる祈願的請求的意識による念佛であれば、真実の念佛ということは出来ない。従って、どうして現実に利益を恵まれる結果を将来するのであろうか。明々白々のことといわねばならぬ。かくて浄土真宗においては現世祈禱の可否は、全く議論の余地がないといわねばならぬ^⑮。

かくのごとく、それこそ、もつとも人間性を基調とする宗教と自負する親鸞教は、人間本然の声である祈禱を否定するのです。

第三章 祈禱否認の理由

(1) おまかせの一つのみ

—大原性実の所説—

さて、では、上記典拠とする諸文が、なぜ現世祈禱を排斥するのでしょうか。これをへ大原性実へは収約して、

- (1) 宗教的真理の立場が絶対的なものであるという認識を欠如せること。
- (2) 宗教的真理の顕現たる縁起の道理を無視すること。
- (3) 現代科学の實際を無視すること^⑯。

の三点としておられます。しかし、このうち、もつとも根本的で重要なのは(1)で、大原師は次のように、論じあげておられます。

宗教的真理の絶対的立場に対する認識を欠くというのは、宗教的真理は救済の主体であり、信仰の対象であるところのもの、これを実際についていえば、阿弥陀如来であるが、阿弥陀佛はキリスト教の神の如く全智全能を語らぬのであるが、衆生救済に関しては、絶対是認の大悲に基づき大善大行たる名号を廻向せられるのである。かゝる

絶対是認の救済法に對して、淺薄な人間の知識や、か弱き人間の能力をもつて祈願祈祷し、その自力の廻向によつて利益を授かるうとするが如きは、畢竟宗教的真理の大法の絶対的實在たるを無視するものであつて、認識不足も甚しいものといふべきである。絶対無上の聖なる法に對する我等の正しい態度は、たゞそれを全幅的に信頼し隨順するのみであつて、おまかせの一つあるのみである。ごさかしい人間のはからいと、功利的な物欲のいのりは、結局絶対的眞実の法を冒瀆する以外の何ものでもない。法の冒瀆はやがてまた自己を冒瀆し破滅に導くことになるのである^⑩。

つまり、阿弥陀佛の救済法を全幅的に信頼し、隨順するのみであり、おまかせの一つあるのみ。ごさかしい人間のはからいと功利的物欲のいのりは結局絶対的眞実の阿弥陀佛の救済の眞理を冒瀆するものにほかならない、という次第なのです。ひたむきに、ひたすらに「南無阿弥陀佛」と唱えていればよいのであつて、あれをこうして、これをあとしてという、人間の思いに基づく祈りや願ひは、かえつて阿弥陀佛の大慈大悲を冒瀆することにほかならぬ、という次第なのです。

このように、救主にうちまかせきつて、おのれの、はからいの仕事をふりまわさぬというメロデーは、キリスト教、しかも、カルヴァン主義の救済論に類似していると言えましょう。とは言え、その点において類似しているとしても、そこからの道は二つにわかれて左右に袂をわかつてしまいます。すなわち、眞宗は祈祷をも、はからいとしてこれを禁忌するのに對して、キリスト教は逆に、「落胆せずして常に祈るべきこと」をすすめヘルカ福音書18・11、「咎むることなく、また惜しむ事なく、すべての人に与ふる神に求むべし、さらば与へられん」としてヘヤコブ1・5、祈祷が奨励・命令されて行くのです。聖書中の各所には、「信仰の祈は病める者を救はん。主かれを起し給はん。もし罪を犯しし事あらば赦されん。このゆえに互に罪を言ひ表し、かつ癒されんために相互に祈れ。正しき人の祈は働きて大いなる力あり。エリヤは我らと同じ情をもてる人なるに、雨降らざることを切に祈りしかば三年六ヶ月のあひだ地に雨降らざりき。かくて再び祈りたれば、天雨を降し、地その果を生ぜり。」として、病氣平癒、赦罪、晴天・

降雨の祈りの例もあげられヘヤコブ5…15、列王I8…35、鎮護国家へ詩122…6、7、46…1、11、武運長久へエジプト17…11、16、ヨシユア10…12、14、家内安全へ詩128…1、6、144…10、15、息災延命へ詩91…14、16、116…1、9、イザヤ38…1、20、懺悔滅罪へダニエル9…4、詩32…5、6、事業繁栄へ創世記39…2、3、23、詩1…3、90…17、等に関する祈願すら公然とささげられているのです。そして、現実のキリスト教会・キリスト者の群においては、公私・細大各方面にわたるあれやこれやの具体的な、いわゆる現世祈禱が明らかにあげられているのです。病人のこと、貧窮者のこと、失職者のこと、受刑者のこと、旅行者のこと、為政者のこと、遺族のこと、求道者のことなど、「こうして、ああして」と。このようなキリスト教徒たちの祈禱とくらべてみると、さきの「(阿弥陀佛の救済法)を全幅的に信頼し随順するのみであつて、おまかせの一つあるのみである。ござかしい人間のはからいと、功利的な物欲のいのりは結局絶対的真実の法を冒瀆する以外の何ものでもない」と言いきつて、阿弥陀如来の大慈悲にうちまかせせる親鸞教徒たちの無祈禱の世界は、何とも魅力的なことです。キリスト教徒たちの日々の祈り―内容において貧弱なばかりか、言葉にもわか仕立てで、欲得の不純もまじり、熱意のほどもあやしげな祈りは、この親鸞教徒の一喝の前に、あわや雲散霧消してしまひそうです……。

(2) 祈りの虚偽性と呪心

―島地大等の所説―

そうです、たしかに親鸞教徒は、人間のささげる祈りが不純・不実の手垢で汚れている点をあげて、祈禱否定論を唱えてもいたのです。すなわち、本願寺派の学匠(島地大等)は、次のように論じていました。

基督教のやうに、神に祈ることを教へる宗教であつても、真に信仰に触れた人であるなら、祈を有せざる大智慈を感得するに違ひない。宗教は祈禱と言ふ低級なる信仰から、終局は無祈禱の高級なる信仰に進まねばならぬものである。親鸞聖人は此の点に着眼して、無祈禱と言ふことを主張され、其の信仰を宣伝されたのである。今一つ他

の言葉を藉つて言ふならば、真実の祈は人間に恵まれていない。人間の祈は総て虚偽である。此の大宇宙にあつて、真実に永久に真の力あり内容ある所の祈は、たゞ阿弥陀佛御一人に存するのみである。如来の本願力と言ふことは、佛の永久の大祈祷と言ふことである。阿弥陀佛が我々人類に対して、不断の念力から、どうしても救はずに置かぬと言ふ偉大なる祈りを、絶えず我々に向つて注ぎ掛けて居られることを、阿弥陀佛の大祈祷と言ふのである。本願力と言ふのである。此の偉大なる願力即ち大祈祷力に動かされて、我々が如来を知り、慈悲の真の父を識り、始めて救入るのである。真実なる如来の祈祷に動かされて、吾々は救はるゝのであるから、吾々の虚偽の祈は、此の場合何の生命も価値も存在して居らぬのである。此の点を考へたならば、祈祷と言ふものゝ意味が、最高の宗教にあつては、何を意味するか、能く分る。

今一つ附加へて言ふと、祈の心は呪の心に依つて裏付けられて居る。人間の場合に於ては、それが虚偽の祈りであるからである。倉田百三君の『出家と其の弟子』に現われている祈は、『俊寛僧都』に現れた所の呪そのものと結び付けて考えることが出来る。人間の祈は、即ち呪を以て裏付けられて居る。是は人間としての自然である。此の意味に於て真の祈は、人間に恵まれてない。たゞ呪を内容とした所の祈のみが、人間に存在することを注意しなければならぬ。斯う言ふ点を考へて見ると言ふと、宗教が高等であるだけ、殊に祈祷と言ふ文字に現れた卑しき信仰は、其の色彩を薄めなければならぬのである。さうして終局は無祈祷の極致、純にして絶対的なる他力の信仰のみが、最高宗教の根本生命をなすものと言ふことになる。斯う言ふ信仰を内容とした神秘主義が、宗教の最高のものである。それが真宗の上に最も能く現れたものである。尚其の信仰の内容を知るに付けて、神の絶対性と道德性とに依る人間の道德的自覚、及び神秘的自覚とに關する親鸞聖人の特徴に關しては委しく言はなくとも、大体是等を以て推察することが出来るであらうと思ふ¹⁸⁾。

このうち、「真実の祈は人間に恵まれてない。人間の祈は総て虚偽である……人間の祈は、即ち呪を以て裏付けられて居る。是は人間としての自然である。此の意味に於て真の祈は、人間に恵まれてない。……斯う言ふ点を考へて見

ると言ふと、宗教が高等であるだけ、殊に祈祷と言ふ文字に現れた卑しき信仰は、其の色彩を薄めなければならぬのである。」と言った言葉は、鋭くも現実を突くもので、かかる真宗教学の鋭鋒を前にして、祈祷をこととするキリスト教徒たちは何と答えるのでしょうか。その現実の祈りは、正に不純・不実・不毛・不屈・不敬・不遜・不束……そのものであることに恥じ入って、みずからの祈祷の声を小さくして行くのでしょうか。

その、祈祷のあやふやさは、たとえば、あの使徒ペテロが捕われて、処刑される前夜。御使いの手引きによって、奇蹟の脱出をなしたペテロが、当時エルサレムの教会集会所となっていたマルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家に帰ってきますが、「そこには大ぜいの人が集まって、祈っていた。」のでした。何を祈っていたかなどと問うまでもなく、彼らは明日にせまった使徒ペテロの運命を思い、その無事、脱出、帰還を、夜を徹して祈祷の真つ最中だったのです。戸を叩く音に、応対に出た女中ロダは、それがペテロの声だとわかると、奥座敷の祈り手たちに、ペテロが門の外に立っていると告げます。ところが、問題はその時、徹夜祈祷会のメンバー、いわば、祈りの猛者たちから返された応答です。彼らは頭をあげると、ロダに向かって、「あなたは気が狂っているのだ。」と言ったというのです。今の今まで、ペテロの無事帰還を祈っていた祈り手たち自身が、いざ、その祈り通りにペテロ無事帰還と聞くと、そんな馬鹿なことが……?といぶかり、ロダを嘲笑って、狂気呼ばわりしたと言うのです。それでも、ロダが「ほんとうだ。」と言いつ張るのを聞かぬや、彼らは、あくまでもペテロ帰還を信じようとしなにかのように、「そんなら、それはペテロ付きの守護天使かなんかだろう。」と言ったのです……。しかし、ペテロが戸を叩きつづけるので、門をあけてみると、そこにペテロがいたので、彼等は「非常に驚いた。」というおまけまでつきますへ使徒12・6〜16。これがあの聖霊降臨の使徒教会の祈祷会の実態であり、正に不純・不実・不束なものであった、ということは恐縮すべき事実であって、キリスト教徒たる者は、いよいよ祈祷の意義に消極的となり、否定的となつて行きましようか。そして親鸞教的な無祈祷論に大きく地崩れして行きましようか。

しかも、そう言えば聖書にも、イエス・キリスト自身「汝らの父は求めぬさまに、汝らの必要な物を知りたまふ。」

と明言され「マタイ6・8」、「汝らの天の父はすべてこれらの物の汝らに必要なを知り給うなり。」と重言しておられたではありませんか。菅原道真のものと伝えられる「心だに誠の道に叶ひなば祈らずとも神や守らん」と言う調子とも共鳴して、ただでさえ、不確かな祈祷への熱心は凍結してしまいませんか。それこそ、「絶対是認の救済法に對して、淺薄な人間の知識や、か弱き人間の能力をもって祈願祈祷し、その自力の廻向によって利益を授かるうとするが如きは、畢竟宗教的真理の大法の絶対的實在たるを無視するものであつて、認識不足も甚しいものといふべきである。絶対無上の聖なる法に對する我等の正しい態度は、たゞそれを全幅的に信頼し隨順するのみであつて、おまかせの一つあるのみである。ござかしい人間のはからいと、功利的な物欲のいのりは、結局絶対的眞実の法を冒瀆する以外の何ものでもない。法の冒瀆はやがてまた自己を冒瀆し破滅に導くことになる。」¹⁰と言つた、ひた押し論理の前に、あえなく祈祷の氣息は断たれるのでしょうか。

特に祈り深き人たることを理想として、いよいよ祈祷の人たるべく乞ひ願うキリスト者は、かえつて殊更にあれこれと祈ること自体が、神の全智性・全能性への信頼不足を物語るものだ、と斬りこまれるとき、大きな衝動を受けることでしょうか。はたして、キリスト教徒の熱心な祈り、祈りのための精進・努力は、むしろその宗教の雑駁さを意味し、その神の御配慮に對する盲目性を自白しているものだ、とされてしまふのですから。

第四章 《念願》的祈祷

もつとも、眞宗教学者の中には、祈祷の語義を分析して、祈祷には、第一義的な神佛に對する強要としての祈りと、第二義的な自己の念願・希望としての祈りの、二つがあることを発見して、第一義の強要としての祈祷は断乎排斥するけれども、第二義の希望・願望・念願あるいは感謝の意味での祈祷ならば、宗教上さしつかえなしとする向きもあります。この意外な屈折は、その元祖・宗祖と仰ぐ法然や親鸞の述作中に、「祈り」の文字の見えるものがあるからなのです。

(1) 法然のいのり

たとえば、〈法然〉のものとしては、

されば有智無智、善人悪人、持戒破戒、貴も賤も、男も女もへだてず、若は佛の在世の衆生、若は佛の滅後の衆生、若は末法萬年の後三寶みなうせたる時の衆生迄も、たゞ念佛ばかりこそ、現在の祈禱とはなり候はめ^⑳（和語燈録）。

念佛の意をしらずして、此の世のいのりに佛にも神にも申し、経をも誦しかき、堂をも作らば、それも先のごとくおほしめすべく候、せめては又後世のためにせばこそあらめ、其要なしなどをほせ候べからず。専修をさくる行にも非ざりけりと思召候べし^㉑（同）。

専修の念佛は、現当のいのりと成候や^㉒（同）。

此の世の祈りに、佛にも神にも申さん事は、そも苦しく候まじ。後世の往生の為めには、念佛の外に、あらぬ行をするこそ、念佛を妨げれば、悪しき業にては候へ。此の世の為めにする事は、往生の為めには候はねば、神佛の祈り、更に苦しかるまじく候^㉓（九巻伝）。

(2) 親鸞のいのり

次いで、〈親鸞〉の述作中のものとしては、次のような箇所が見えます。

それにつけても念佛を深くたのみて世のいのりに心に入れて申し合せたまふべしとぞおぼえ候。御文のやうおほかたの陳状よく御はからひども候ひけり、うれしく候。詮じさふらふ所は、御身にかぎらず念佛まふさん人々は、わが御身の料は思召さずとも、朝家の御ため国民のために念佛をまふし合せたまひさふらは、めでたう候ふべし。往生を不定に思召さん人はまづわが身の往生を思召して御念佛さふらふべし。わが身の往生一定と思召さん人は佛の御恩をおぼしめさんに御報恩のために御念佛こゝろに入れて申して『世のなか安穩なれ、佛法ひろまれ』と思召すべしとぞ覚え候²⁴（御消息集）。

念佛を御心に入れてつねに申して、念佛そしらん人々此世・後の世までの事をいのりあはせたまふべく候²⁵（同）。

阿弥陀如来^{らいけ}化して、息災延命のためにとて、金光明の寿量品ときおきたまへるのみりなり。山家の伝教大師は国土人民をあはれみて、七難消滅の誦文^{じゆもん}には南無阿弥陀佛となふべし。一切の功德にすぐれたる南無阿弥陀佛となふれば、三世の重障みなながら、かならず転じて輕微なり。南無阿弥陀佛となふれば、この世の利益きはもなし。流転^{るてんりんね}輪廻^{りんね}のつみきえて、定業^{じやうごふ}中天のぞこりぬ。南無阿弥陀佛となふれば、梵天・帝釈帰敬す。諸天善神ことごとく、よるひるつねにまもるなり²⁶（現世利益和讃）。

すでに、親鸞は「佛号むねと修すれども、現世をいのる行者をば、これも雑修となづけてぞ、千中無一とさらはる、²⁷」と申していましたが、以上の諸文にあげられた「祈り」は、むしろ「純粹な『世の人々の希望』又は『世の人々の為の希望』²⁸」なりとして、區別分類されて、へ神子上悪龍^{かみじのあくりゆう}によれば、次のように綜合されるのです。

『いのり』の語義に関しては国語学上種々解説²⁹がなされてあるが、その意義は必ずしも一定していないのである。即ち種々の内容を含む語であるが、これを大別すると二つになる。即ちその一つは神佛に対して祈願すること

であり、他の一つは人生諸般のものごとに対して、希望や願望を示す語である。ここにいう『いのり』は前者の意味でなくて後者の意味であり、純粹な希望の意味を現わすのである。農家の人々が厄日に暴風を避けたいといのり、人の子の親としてその子の病氣平癒をいのることは当然過ぎる程当然である。このような人情自然の発露としての生活感情、萬人の有する心の願い、止むに止まれぬ人間の希望を表明する『いのり』をも、わが真宗において否定するということは決してないのである。³⁰⁾

第五章 《強要》的祈祷

ともかくも、神子上師などは祈祷を分類して、〈念願〉・〈希望〉としての祈りは定義上さしつかえなしとしたわけですが、さりとて言え、〈強要〉としての祈りに対しては、絶対に許容しないというのです。しからばここで、ひるがえってキリスト教における祈祷、聖書中の祈祷例は、どうなのでしょう。それは、はたして言うところの念願としての祈祷でしょうか。否々、それこそ〈強要〉としての祈りとも言うべき祈祷例が多々見つけられるのです。つまり、真宗・親鸞教とキリスト教とは、この限定された場においても真正面しているのです。

たとえば、次のキリスト自身が語った譬話を見てください。このとき、キリストは「祈りを教えてください」と言う弟子たちの求めに応じて、祈りの真髓を語り出しています。

あなたがたのうち、だれかに友だちがいるとして、真夜中にその人のところに行き、『君。パンを三つ貸してください。友人が旅から私のうちへ来たのだが、出してやるものがないのだ。』と言ったとします。すると、彼は家の中からこう答えます。『めんどろをかけないでくれ。もう戸締りもしてしまっただし、子どもたちも私も寝ている。起きて、何かをやることはできない。』あなたがたに言いますが、彼は友だちだからということで起きて何かを与えることとはなしにしても、あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要な物を与えるでしょう。わたしは、

あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであつても、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。へルカ11…5〜10。

もう戸締めもしたり、寝てしまつたと、ことわるのに、なお戸を叩きつづけるので、たまらずに戸を開けて応ぜざるをえなかつた、という趣旨は、祈祷は祈祷でも、単なる希望・念願の域を突破して、真宗教学の嫌う、いわゆる「強要」としての祈祷の域に入るべきで、この譬話はそのような祈祷をすすめたものと言えましょう。「彼は友だちだからということで起きて何かを与えることはしないにしても、あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がつて、必要な物を与えるでしょう」と、されているのです。

しかし、ここで念のために、もう一つ同じイエスが語つた、いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えた、²やもめと裁判官のたとえ³をあげて見ましょう。

「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやつて来ては、『私の相手をさばいて、私を守ってください。』と言つていた。彼は、しばらくは取り合わないでいたが、後には心ひそかに『私は神を恐れず人を人とも思わないが、どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。でないと、ひっきりなしにやつて来てうるさくてしかたがない。』と言つた。」そして、イエスは付言しています。「不正な裁判官の言つていることを聞きなさい。まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放つておかれることがあるでしょうか」へルカ18…1〜8。

この「うるさくてしかたがないから」・「でないと、ひっきりなしにやつて来てうるさくてしかたがない」と言つた

言葉は、一目瞭然、祈りは祈りでも、〈強要〉の祈りを指しているではありませんか。いや、それが、この譬話のポイントだったのです。

(1) 叩けよ・さらば

— 柳 宗悦の所説 —

ところで、以上二つのうち前の方の『真夜中の友』の譬話には、「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます」ヘルカ11・9」という文句が付けられているのですが、この言葉について、民芸学者の〈柳 宗悦〉は、次のような不満をもらしておられます。

聖書に『求めよ、さらば与えられん。叩けよ、さらば開かれん』という句がある。聖書の中でも有名な句で、この言葉はどんなに沢山の説教を呼び起こさせたかわからぬ。イエスの言葉として最も広く人々に膾炙されたものと言えよう。

しかし私はどうもこの句に満足ができぬ。宗教家ともあろうイエスの言葉だとは受け取り難いのである。何か記録の誤りではないか。それとも訳語の間違いではないか。

ちよつと考えると、これで一向差し支えないとも思われようし、これでも十分な教えを孕んでいるともいわれよう。

しかし、それにも拘らず私が満足し得ないのは、『さらば』という一語が入っているからである。ここでは求める私と与える神とが相對する。そうして私の求めに必ず応えるのを神が約束しているというのである。だが叩くから開かれるという表現は、私が因で、神が果である。このことは私の因がなくば、神の果もまたないことを意味しよう。『さらば』という言葉は、このことを語る。人の行いがあって神の行いがこれに応ずるといことになる。しかし神の行いはそんな条件つきであらうか、なまぬるいであらうか。

私の考えでは叩くから開かれるのではなく、開かれているゆえに叩くというべきではないか。常に神が因で人間のほうが果なのだと、逆に考えるほうが、至当だと思える。否『さらば』というような態度は神の行為にはあるまい。むしろ無条件に、いつだとして開いているのが神の行為であろう。否、さらにつきつめていうなら、神が開くのではなく、開くことが神なのである。それゆえ叩くことが叩くまいが、そんな人間の行為に左右されない。叩くということより、開くほうが先なのである。もつとも、ここで先というのは時間的前後ではなく、永劫の今、即今の行為で『さらば』というような前後の時間を持たない意味である。

それゆえ、人間は既に開かれている中で叩いているに過ぎないのである。気がつけば叩く自分を省みて恥かしい想いが起ころである。愚かな自分のために、既に扉を開いて待つその恩沢に、無料の慙愧と感謝とを、感じるであろう。人間が叩くから始めて開くというような、なまぬるい行為と見做すわけにはゆかぬ。右に向こうが、左に向こうが、向かうところ、これ総て開かれた扉なのである。

だから叩いて、開かれることを感じるのは、まだ信心の生活だとは言えぬ。むしろ開かれているので叩くのだというなら筋が通る。そういう用意なくして神は叩くという行いを人間に許しはしないであろう。そうなると叩くとそれ自身に開かれることが意味されているので、決して叩くから開かれるのではない。開かれている中で叩いているに過ぎないのである。

聖書の句も真意は、あるいはそうなのかも知れぬが、どうも『さらば』という一語の挿入が、全体の言葉を浅くしてしまう。だから福音記者の記録の誤りではないかと思われてならぬ³¹⁾。

この一代の高名なる美学者の一文の余韻は、深く、大きく響いて、いわゆる〈願望〉としての祈祷ならまだしものこと、〈強要〉的な祈祷に不審の念をもらし、それは〈人因神果〉という反宗教的なものともなると批判されていたのです。

そう言えば、聖書にも、キリスト自身の言葉として、「祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返しては

いけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っただけです。だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです」とありましたが、ヘブライ6・7、8、かかる不快の感情を吐きかけられては、キリスト者たる者はいよいよもって、祈りの口をつむるべきでしょうか。キリスト教徒たる者、いけません、です。

その上、さきほどの「真夜中の友」の譬話の主人公の「あくまで頼み続ける」の「あくまで」という原語は、むしろ、「恥知らずに」・「破廉恥なほど」・「厚かましく」・「ずうずうしく」と訳すべきものでした。③。それこそ、「叩けよ、さらば」という程度でも云々される柳氏に、この事実をおしらせしたら、一体どのような反感をあらわされることでしょうか。

(2) 非・御利益主義

もっとも、この辺で一言しておきたいのですが、(強要的)、しかも、恥知らずなほど強要的であっても、「真夜中の友」の譬話の主人公のそれは、トレンチが言うように、彼自身の必要のため、彼自身の空腹のためではなかった。それは、遠来の客のため、真夜中に不意に飛びこんで来た来客のため、空腹の友人のための配慮だったのです。「君。パンを三つ貸してくれ。友人が旅から私のうちへ来たのだが、出してやるものがないのだ」と、言われている通りです。自利のためではなかったのです。利他のためだったのです。隣人の必要のための神聖な責務をはたそうとしての熱心だったのです。このことは、あの創世記の昔ソドムの町のためになされたアブラハムの厚かましいまでの懇願においても同様です。背徳・腐敗の巢と化したソドムとゴモラへの審判がくだされるにあたって、義人アブラハムは神の前に立ちます。

アブラハムは近づいて申しあげた。『あなたはほんとうに、正しい者を、悪い者といっしょに滅ぼし尽くされるのですか。もしや、その町の中に五十人の正しい者がいるかもしれませぬ。ほんとうに滅ぼしてしまわれるのですか。』

その中にいる五十人の正しい者のために、その町をお赦しにならないのですか。正しい者を悪い者といっしょに殺し、そのため、正しい者と悪い者が同じようになるというようなことを、あなたがなさるはずがありません。ともありえないことです。全世界をさばくお方は、公義を行なうべきではありませんか』へ創世記18・22～32。

モーセの執念の食いさがりです！ これを読んでみると、実に聖書における神と人との関係は、かくも丁々発止とした人格的で生のものでしたのです。このモーセの強談判に、主なる神は「もしソドムで、わたしが五十人の正しい者を町の中に見つけたら、その人たちのために、その町全部を赦そう」と答えられます。でも、アブラハムは、その五十人を、四十五人、四十人、三十人、二十人、十人と値切るのです。そして、神は、このアブラハムの「値切り」に応じられるのです。いや、創世記の記事は値切らざるを得なかった、という風に描いているのですへ創世記18・23～33。これももしも、神が、ただに超絶的な恐ろしい神であったり、抽象的な観念であったとしたならば、かかる事は想像だに出来ないことでしょう。私は、この描写、人なるアブラハムとその主なる神との間にかわされた「打てば響く」やりとりに、限らない親しさ、正に慈父と愛子との間柄を新鮮に感ぜざるをえません。しかも、このアブラハムの、いわば身体を張つての懇願・強談・強訴も、断じて、彼自身のためのものではなかったということです。それは、あくまでも他者のための、ソドム、ゴモラの住民のためのものであった、ということを銘記しておいてください。

しかし、なるほど、さきの「不正な裁判官」の譬話においては夜昼ひっきりなしに、うるさく訴えた「やもめ」は、自分自身のための訴えでした。けれども、彼女の訴えが不正な訴えであったとは言われていません。むしろ、よくよく案じてみると、この譬話にはとかく社会的に日影者とされ、見殺しにされる不幸な「やもめ」への暖い、いや強い同情と関心と熱愛とが背景をなしていたのはありませんか。不正なのは、金ならぬ「やもめ」の訴えなんぞ……として、これを無視せんとした、「神を恐れず人を人とも思わない」裁判官の方だったのではありませんか。

それこそ聖書における、キリスト教における現世祈祷は、あのエリヤの晴天・降雨の祈祷にしてもへ列王I 8…35

36、ヤコブ5・15の「神の審判と主権とをあらわすためのものであり、その他鎮護国家へ詩122・6、7。46・1・11、武運長久へ出エジプト17・11・16。ヨシユア10・12・14、家内安全へ詩128・1・6。144・10・15、息災延命へ詩91・14・16。116・1・9、懺悔滅罪へダニエル9・4。詩32・5、6、事業繁栄へ創世記39・2、3。詩1・3。90・17、のいずれにしても、ひたすら神の義の宣布を願い、神の愛をあがめ、神の御名を讃える、神聖・崇高な調べにおける現世祈祷だったのであって、いわゆる御利益主義のそれではなかつたのです。

次に日本の二先輩の言葉を参考に引用しておきましょう。一つは「植村正久」から、

祈りの目的とする神がすでに加持祈祷などの目的とする偶像菩薩と異なるを忘るべからず。試みに世の所謂神佛に祈願することを聴け。曰く、家内安全、息災延命、火難盗難、水難剣難、あらゆる病氣、貧乏、艱苦を救いたまへと。皆これ自家の便宜を謀るの語、利己の念その中に溢れ、俗氣鼻を衝く。これを陋しとするも怪しむに足らず。かくのごときご祈祷連の仲間に入ると思われるを愧ずるもまた一理なきにあらざるなり。しかれどもキリスト教の祈りはさる卑屈なるものにあらず。倫理の道德の分子を大きく、第一に神とその聖國の事を祈り、次に天下同胞を想い遣りて己が道德の有様を憂うるなど、根本とし、規模甚だ着想の高尚なること君子の心術を示せりと言わざるべからず。マタイ伝六章に見えたる主の祈りのごときものを熟考すれば、この事明らかならん³³。

そう言えば、さきの「真夜中の友」の譬話は、主の祈りのあとに記録されておりヘルカ11・2・4、主の祈りが、まず「父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。」として、ひたすらに神を仰ぎ、神の栄光のあらわれることを願う祈願で始まっていること。また、その後半にしても、「私たちの……私たちが……私たちに……私たちを」と、自己の我利ではなくて、隣人をも含めた「私たち」のための祈願であることも、一言しておきましょう。

次に「内村鑑三」から、

氣儘勝手の祈祷は基督教の神の聴いて下さる祈祷でない事を私は知って居ります、私の神は其人の何商売に従事して居るかに関はらず、多くの賽銭をさへ捧げて祈る者には私福を与ふるとか言ふ大黒天のやうな神様では御座いません、又は仇を呪詛する為め丑刻詣の祈願に耳を傾けらるゝと言ふ金毘羅のやうな神様でも御座いません、私の神はそんな劣等なる神様とは全く違います、即ち義と愛との神でありますから、私の私慾を念ひ、他人に害を与へるやうな祈願は一切聴いて下さりません、只夫れ計りではなく、此の如き祈祷を為す者には反つて嚴罰を加へ給ふ神であります。³⁴⁾

さて、以上、少々まわり道をしながら、いわば「強要」的な祈祷について、それが「強要」的であるからといって、我利我利のゴリヤキズムではないことを述べて誤解のないようにしておきましたが、それにしても驚かざるを得ないのは、神が、いづれの譬話においても、無理矢理、真夜中に「叩き起こされた男」にたとえられたり、あえて「不正なる裁判官」に、たとえられているということです。「友だちだからということ起きて何かを与えることはしないにしても、あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要な物を与える。」という「非情な言葉や、「どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。でない」と、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない。」といったやうな無情なる言葉を、あえて神のものとしているということです……。人は一見して奇異の念を起こされるでしょうが、やがてこちら辺にキリスト教における祈祷の秘密、その祈祷が、神と人との親密・昵懇な間柄に成り立っているのだという秘密があらわれているのを、すでに感ずる方も少なくないことでしょう。今はともかく、「バプテスマのヨハネの日以来今日まで、天の御国は激しく攻められています。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています」と、キリストは明言するのです「ヘマタイ11・12」。

〈次回につづく〉

〈注〉

- ① 山中峯太郎著『廻光遍路・イエスカ親鸞か』（双樹社）一九二〇―一九四頁。
- ② 『望月佛教大辞典』「祈祷」の項。
- ③ このほか、親鸞出現前後におこなわれていた祈祷例が諸文学作品にあらわれていますが、それらについては、神子上恵龍著『真宗学の根本問題』（永田文昌堂）三〇六―三〇七頁参照。
- ④ 「念佛往生義」。『高僧名著全集・法然上人篇』（平凡社）一四二頁。
- ⑤ 「顕浄土方便化身身分類」六末九七。『真宗聖典』（島地大等編・明治書院版）一九八頁以下。
- ⑥ 「高僧和讃・善導大師」。島地篇『真宗聖典』一六二頁。
- ⑦ 「愚禿非歎述懐和讃」。島地篇『真宗聖典』一七三―一七四頁。
- ⑧ 「持名鈔」末。『真宗聖教全書』（大八木興文堂）三、列祖部 一〇三頁。
- ⑨ 「御文章」一〇・一六、一七。島地篇『真宗聖典』六五六頁。
- ⑩ 「御文章」一七・四。島地篇『真宗聖典』六六二頁。
- ⑪ 蓮如「帖外御文」『高僧名著全集・蓮如上人篇』（平凡社）二三五―三三六頁。
- ⑫ 「九十箇条制法・八六」。笠原一男著『真宗における異端の系譜』（東大出版会）二二七頁による。
- ⑬ 「蓮如上人九十箇条・二二」。同右書 一四二頁。
- ⑭ 「蓮如上人九十箇条七八」。同右書 一四八頁。
- ⑮ 大原性実著『真宗学概論』（永田文昌堂）二五二―二六二頁。
- ⑯ 同右書 二五七頁。

なお、神子上恵龍師は祈祷否定の理論的根拠を、以下の八由に要約しておられます。

(一) 因果の理法に反するが故に。

(二) 念佛の行者には善神は守護し、悪神は妨げをなさざるが故に。

- (三) 祈祷は各種の弊害を伴ない易きが故に。
- (四) 祈祷は願生心の妨げとなるが故に。
- (五) 機の深信と反するが故に。
- (六) 法の深信と反するが故に。
- (七) 念佛の行者は現世の吉凶禍福の如きは問題とならざるが故に。
- (八) 祈祷は神を冒瀆することとなるが故に。
- (一) 真宗学の根本問題』三三〇頁。
- ⑰大原性実著『真宗学概論』二五七―二五八頁。
- ⑱島地大等著『思想と信仰』(明治書院)三七二―三七四頁。
- ⑲大原性実著『真宗学概論』二五七―二五八頁。
- ⑳「和語燈録」卷第三の二。昭和新纂『浄土宗聖典』(東方書院版)一六〇頁。
- ㉑「和語燈録」卷第三の五。昭和新纂『浄土宗聖典』一六二頁。
- ㉒「和語燈録」卷第三の七。昭和新纂『浄土宗聖典』六四頁。
- ㉓「津戸三郎へつかはす御返事」。「高僧名著全集・法然上人篇」四〇四頁。
- ㉔「御消息集一、性信御坊あて」。島地篇『真宗聖典』五三六頁。
- ㉕「御消息集九、性信御坊あて」。島地篇『真宗聖典』五四三頁。
- ㉖「現世利益和讃」。島地篇『真宗聖典』一五六頁。
- ㉗「高僧和讃」・善導大師。島地篇『真宗聖典』一六二頁。
- ㉘大原性実著『真宗学概論』二六一頁。
- ㉙神子上恵龍著『真宗学の根本問題』三〇九―三二二頁参照。
- ⑳大原性実著『真宗学概論』二五九―二六〇頁。

- ③① 柳宗悦著『柳宗悦選集』（春秋社）一八七～一八八頁。
- ③② ギリシヤ原語は *aváðeua* Archbishop Trench, *Parables of Our Lord*, pp. 265～266 参照。
- ③③ 『植村正久著作集』（教文館）5、二四三～二四四頁。
- ③④ 『内村鑑三全集』（岩波書店）1、三九八～三九九頁。
- ③⑤ 求めたのは「パン三つ」でしたが、「必要な物を」として、祈りの勝利がうたわれていることにも注意。

[Abstract in English]

Prayer and Non-Prayer (I): A Comparison of Christianity with True Pure Land Buddhism

S. Obata

The True Pure Land sect, inaugurated by Shinran, insists on the uselessness of prayer, or, the theory of non-prayer, because of its thoroughgoing criticism of the falsehood of human activities and of its propagation of absolute dependence on Amitabha. How can Christianity respond to the masterful opinions of the Buddhist scholars affirming this view? This essay reexamines their teachings on prayer and rereads the Christian Bible in contrast to them.

〔日本語要約〕

祈祷と無祈祷

—— キリスト教と親鸞教の対比 ——

小 畑 進

親鸞の〈浄土真宗〉は、人為の虚偽性に対する徹底的糾弾と、阿弥陀佛に寄せる絶対的信頼ゆえに、〈祈祷不要〉・〈無祈祷〉を立場とする。

それにつわる諸賢の達人的所説に対して、キリスト教は如何なる応答をなしうるか。諸家の祈祷論を再考し、いまいちど聖書を読み直してみる。